



「性の多様性」

慶應義塾大学保健管理センター教授 井ノ口美香子

近年「性の多様性」についての話題が増えています。私たち大人は子どもたちの質問にわかりやすく答えることができるでしょうか。

生物の性は長きにわたって、オスカメス（男性か女性）のどちらかに分類されるものとされてきましたが、その一方、古くからこうした性の捉え方では説明がつかない事象も知られていました。そこで、二項対立的な性の表現型（オスカメス）を、オスからメスへ連続する性の表現型（性スペクトラム）と捉え直すことが提案されています。その考え方に基づくと「こころの性」も「からだの性」も、一人ひとり、わたし（自分）だけの性を持っているという新しい考え方にたどりつき、これこそが「性の多様性」である、と理解できます。とても面白い考え方だと思いませんか。

「こころの性」のうち、「ジェンダー・アイデンティティ（性同一性）」は少し理解の難しい言葉です。「自分の性別は同じくこうだ」とわかっているかについて表す言葉で「性同一性」ともいい、似た言葉の「性自認」（「自分がその性別だ」と思うこと）とは区別されます。そして「ジェンダー・アイデンティティ」と生まれた時に割り当てられた性（法律上の性）が異なった場合には不安や違和感を持ちやすくなる、というのは想像に難くないと思います。ではもし、子どもがそうした不安や違和感を話したら、皆さんはどうしますか。

是非、私たち大人が心に留めておきたいことは、「ジェンダー・アイデンティティ」は特に子どもの成長段階において移り変わることもあるということです。何でもすぐに結論を出したくなる今の世の中では難しいかもしれませんが、性とは少しずつ作られていくものと考え、決めつけずによく話を聞き、あいまいなものはあいまいなもののまま大事に抱えつつ、ゆっくりと向き合うことが大切といわれています。

もしかすると「性の多様性」の話題とは、ある種「自分らしさ」の話なのかもしれません。もし子どもに質問されたら、ゆったりとした気持ちで、一緒に考えてみようと言うのが良いのではないのでしょうか。

